

九州大学病院で体外受精治療を開始

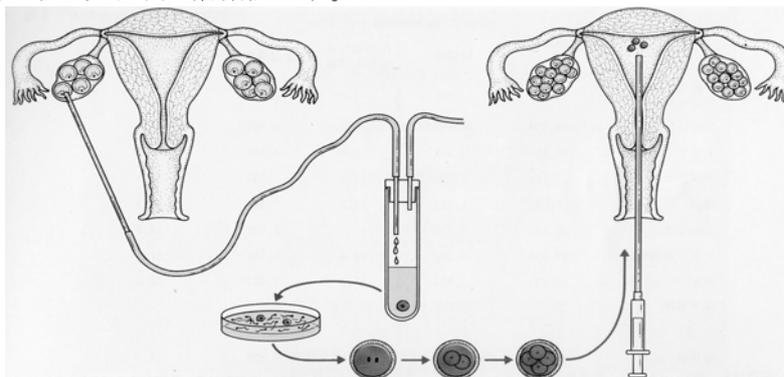
概要 九州大学病院産科婦人科では、平成18年12月より生殖補助医療の1つである体外受精を開始いたしました。現在出生した児の65人に1人は生殖補助医療により妊娠しており、この技術は不妊症の標準的治療になっています。しかし、この方法は多胎妊娠の確率も高くなり、高度周産期医療施設をもつ九州大学病院で施行される意義は大きいと思われます。また、内科的合併症のある方や婦人科手術後の方など他科との連携や密な経過観察が必要な方の不妊治療も行えるようになりました。研究面では、将来的に幹細胞を基にした再生医療への発展も期待されます。

■ 背景

現在出生した児の65人に1人は生殖補助医療により妊娠しており、この技術は不妊症の標準的治療になっています。しかし、生殖補助医療による妊娠は多胎になる確率が高く、その数が増えるにつれ新生児医療の現場ではベッドが不足するという問題も生じてきています。このような状況の中、高度周産期医療が行える施設をもつ九州大学病院で厳格な適応のもと体外受精を行う意義は大きいと考え、今回この治療法を開始することになりました。

■ 内容

妊娠を希望されているご夫婦の中で一般的な不妊治療法のタイミング法、排卵誘発法、人工授精等を十分行ったけれど妊娠できなかったご夫婦や、これらの方法では妊娠が極めて難しいと判断されるご夫婦が体外受精・胚移植の適応になります。「卵巣で発育した卵子を体外に取り出し（採卵）、精子と受精させ（媒精）、数日間育て（培養）、得られた受精卵（胚）を子宮内に戻す（胚移植）方法」により、妊娠成立を目的とする不妊治療法です。



■ 効果

本法の一般的な治療成績は採卵あたりの妊娠率が約25%であり、採卵あたりの出産(分娩)率は18%です。また女性の年齢が高くなるに従って低下し、40歳以上では約10%程度といわれています。九州大学病院で施行された体外受精により妊娠された方はご本人の希望があれば、引き続き高度設備を整えた当院の周産・母子センターで管理いたします。

■ 今後の展開

- 1) 内科合併症の同時管理が難しく他の病院で治療をあきらめていた方も、全身状態や適応を考慮の上、他科と連携しながら、不妊治療を行います。
- 2) 子宮など悪性婦人科手術後の不妊症で、原疾患の密な経過観察が必要な方も経過をみながら不妊治療を行います。
- 3) 今回体外受精開始のために設置した施設は、将来的には幹細胞を基にした再生医療の研究の基盤となります。

【用語解説】

タイミング法：自然月経周期の排卵日に夫婦関係をもってもらい妊娠成立をめざす。

排卵誘発法：内服薬や注射薬で卵巣内に卵胞を発育させた後、注射薬で排卵させる方法。

排卵を調整できる。

人工授精：卵管に到達できる精子数を増やすため、子宮内に直接夫の精子を注入する方法

【お問い合わせ先】

九州大学医学部産婦人科教授 和気 徳夫

電話：092-642-5391

FAX：092-642-5414

Mail：wake@med.kyushu-u.ac.jp